

特別支援教育の国際連携に関する研究
その2 タイ王国の特別支援教育に関する一考察
International Collaboration of Special Needs Education (2)
: A Study on Special Needs Education of the Kingdom of Thailand

池谷尚剛*・大場伸哉**・池谷幸子***

IKETANI Naotake, OBA Shinya and IKETANI Sachiko

*岐阜大学教育学部 **岐阜大学応用生物科学部 ***岐阜県立大垣特別支援学校

*Faculty of Education, Gifu University **Faculty of Applied Biological Sciences, Gifu University

*** Ogaki Special Needs School, Gifu Prefecture

要旨

障害のある生徒の卒業後の進路と就労、社会適応に関する課題は、日本だけではなく世界各国で共通している。そこで、特別支援教育の国際連携を推進することで課題解決の方向性を見出すことを試みた。

本研究では、特別支援教育に関する連携を進めてきたタイ王国の(1)特別支援教育センターと特別支援学校の関係性を明らかにすること、(2)作業学習における就労支援の現状と課題を検討することを目的とした。訪問調査した結果、(1)それぞれが機能分担して障害のある幼児・児童・生徒の療育と特別支援教育を推進していることが確認できた。(2)知的障害を対象とする特別支援学校の校内作業種はタイの地域社会の中で就労の可能性の高い職業種が多いこと、日本から導入された「さをり織り」が行われていること等が分かった。しかし、「さをり織り」を実際の就労につなげることは難しく、タイ社会でのブランド化を進めることが課題として明らかになった。今後、日本とタイ王国の更なる交流を進めていき、特別支援教育に関する国際連携を展開することが重要であると考えられた。

キーワード：タイ王国 特別支援教育 国際連携

Key Words : Kingdom of Thailand , special needs education, international collaboration

I. 目的

障害のある児童・生徒の卒業後の進路選択、特に就労、社会適応に関する課題は大きい。これは日本だけでなく、世界各国でも共通する課題であることに着目し、特別支援教育に関する国際連携のあり方を模索する研究を進めてきた。

研究の構想として、ASEAN 各国で広くみられる農業や食品加工に関わる特別支援教育の教育内容や障害者の就労を踏まえて、①特別支援教育の教育制度と就労支援の実際について現状を明らかにする。そして、② 障害のある児童・生徒の卒業後の進路や就労状況について調査研究を進め、教育内容との関連を明らかにする。さらに、研究成果を踏まえて、③ASEAN 各国の特別支援教育との相互的な連携協力を模索・検討して、各国の現状に適した特別支援教育プログラムを共同で開発する国際連携を実現したいと考えている。

池谷・池谷 (2016) では、これまでに特別支援教育に関する連携協力を進めてきたタイ王国の特別支援学校を訪問調査して、知的障害者の作業学習、就労支援として農業分野が適していることを指摘し、国際連携の視点から日本の作業学習を見直す考察を進めている。本研究では、池谷・池谷 (2016) の調査を継続して、(1) 特別支援教育センターと特別支援学校の現状を確認すること、(2) 特別支援学校における作業学習と就労支援の現状と課題についてさらに検討を進めることを目的としている。そして、特別支援教育における国際連携の在り方について考察を深めていきたい。

II. 研究方法

タイ王国の特別支援学校、特別支援教育センターを訪問調査し、両機関の現状を確認し、特別支援学校における就労支援の現状を踏まえた国際連携の在り方について検討する。

III. 結果及び成果

1. タイ王国の特別支援教育の概要

タイ王国教育省基礎教育委員会事務局 (Office of the Basic Education Commission Ministry of Education in the Kingdom of Thailand : 以下、OBEC) は、タイ全土に設置された183の小学校区と42の中学校区の地方教育区を管轄する19の地方教育区事務局を総括し、初等・中等教育に関わる行政を掌握している。監督下には、小学校28,470校、中学校2,358校、福祉学校 (welfare) 51校、特別支援学校 (special) 46校の約31,000校がある。

特別支援教育の対象となる障害種は、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由・病弱、学習障害、言語障害、情緒・行動障害、自閉症スペクトラム障害、重複障害の9障害種について判定基準が定義されている。

特別支援学校46校は障害種別で設置されていて、知的障害19校、聴覚障害21校、視覚障害2校、肢体不自由・病弱4校であり、児童生徒数は約12,000人、特別支援学校教員数は約1,255人である。

2. タイ王国特別支援教育センターの訪問調査

障害のある乳幼児や児童・生徒の支援を行う機関として、76の特別支援教育センター (12 Regional Center, 64 Provincial Center) が設置されている。特別支援教育センターは、1) センターで教育を受ける幼児・児童、2) 在宅、入院、インクルーシブ学校等で教育を受けている児童・生徒を対象としている。

1) 訪問調査：平成28年12月

チョンブリ特別支援教育センター (Regional Center)

このセンターは Regional Center として、バンコク圏域を含む広域から約400名の幼児・児童・生徒とその両親、担当教員を受け入れている。このうち、重度の障害により在宅している者が29%、慢性疾患等で入院している者が27%であった。センターは、早期発見・早期介入の取り組みを進めていて、インクルーシブ教育の推進にも取り組んでいるとのことであった。このセンターは Regional Center としての役割を果たすため、プールや乗馬を活用した療育指導や、視覚化したカードを活用した自閉症を対象とする生活指導等を実践していた。また、寄宿舎を設置して、遠方の児童・生徒に対応している等、特別支援学校的な役割も担っていた。(図1～図13)



図1 遊具施設に設置されている表示板



図2 設置されている幼児用の遊具施設



図3 園内に設置されている乗馬訓練施設



図4 園内に設置されているジャグジー機能のあるプール



図5 指導訓練室



図6 スノーブレンの設置された指導室



図7 ボールプールが設置されている指導室



図8 Autistic Friendly Roomと表示されている



図9 トイレに設置されている視覚カード



図10 一日の活動内容が個別に視覚カード化されている



図11 最近設置された寄宿舎の遊具で遊ぶ幼児



図12 園内の道路に描かれたポケモン



図13 広い施設内に設置されている学習用道路
(タイは日本と同じで車は左側通行)

3. タイ王国特別支援学校の就労支援に関する調査

タイ王国特別支援学校における就労支援として、作業学習に注目して、作業種、校外の実習状況、指導体制の現状について、池谷・池谷 (2016) に引き続き、実地調査を実施した。

1) 調査対象

第一回調査（平成 25 年）～第三回調査（平成 27 年）（池谷・池谷、2016）

知的障害校 3校 聴覚障害校 1校

校内／校外作業学習の参観

第四回調査：平成 28 年 12 月：本研究

知的障害校 1校—主に校内作業学習の参観

2) 作業種・作業学習の現状、課題等

知的障害者を対象とする特別支援学校の校内作業種は、タイの地域社会の中で就労可能性の高い職業種である農業（米・野菜の栽培・収穫）、養鶏等の畜産、魚や蛙等の養殖、理容（理髪）、木工、喫茶・食堂（調理・配膳・接客等）、自動車清掃、花輪等の日常生活品や観光用の土産物の作成が中心となっている。校外作業種では、工場での製品作成、自動車清掃、量販店の業務（商品整理、商品陳列）、食堂（配膳・接客等）等であった。このうち、校内の農業、畜産、喫茶は主に教員が指導していて、校外の食堂、自動車清掃、工場での製品作成、量販店業務は、日本の現場実習と同様、実習先の職員が対応し、教員は巡回指導の役割であった。また、校内作業種では、理髪、需要の多い切り花を用いた花輪作成が特徴的であった。国際連携として注目したのは、日本から導入された「さをり織り」であった。日本で、「さをり織り」の研修を受けた教員が指導にあたることにより、技術的には高いレベルの作品が作成されている。また、日本の関係団体から必要な機材が寄付される等により、多数の生徒が実習を体験することができている。しかし、実際の就労に繋げることは難しいようで、タイ社会へブランドとして浸透していくことが今後の課題と言える（図 14～図 21）。



図 14 理髪の校内実習



図 15 校内に設置されている理容・美容実習室



図 16 農作物の栽培（校外販売用のポスター）



図 17 校内に設置された水耕栽培施設



図 18 養鶏施設 (卵の販売)



図 19 お土産用の文字 (粘土) に色を塗る生徒



図 20 花輪の作成 (材料の花は主に校内栽培)



図 21 「さをり織り」の実習室 (製品は販売されている)

IV. 考察

本研究では、タイ王国の特別支援学校と特別支援教育センターとが、それぞれ機能分担して障害のある幼児・児童・生徒の療育と特別支援教育を推進していることを、訪問調査によって確認することができた。また、特別支援学校で取り組んでいる作業学習は、農業・畜産・養殖等の作業種、タイの日常生活と直結する理容や喫茶・食堂等の飲食サービス業や花輪の作成、「微笑みの国」を標榜する観光産業の土産物の作成等、タイ社会の主な就労状況を反映した実践的な作業種が多いことが確認できた。一方で、部品生産工場や大型スーパー等での実習は一般企業への就労を想定した作業内容となっていることから、タイ王国の特別支援学校における就労支援プログラムは現実を反映した多様な、それでいて、実践的な作業学習の開発に取り組んでいる状況であることが確かめられた。また、「さをり織り」の事例では、日本とタイとの国際連携が有益な成果につながったことが明らかになった。さらに、ロップブリー特別支援学校と愛知県立安城特別支援学校とが姉妹校協定を結ぶことで、作業学習のノウハウが交流されていることも確認でき、今後、さらなる交流を進めることで国際連携が展開することが期待できる。こうした国際連携が成果をあげている「さをり織り」の事例や、農業分野の事例を通して、特別支援教育に関する国際連携について、教育制度、文化等の要因も含めて、考察を深めていきたい。

文献

池谷尚剛・池谷幸子 (2016) : 特別支援教育の国際連携に関する研究、特殊教育学会第 54 回大会発表論文集

日本教育大学協会 (2005) : 世界の教員養成 I アジア編、学文社

西澤希久男(2015) : 第3章 タイにおける障害者の教育を受ける権利とその現状 : 小林昌之編、アジアの障害者教育法制—インクルーシブ教育実現の課題—、アジア経済研究所

大場伸也 (2016) : 科学研究費補助事業研究成果報告書 (課題番号 25301042)

プラソムシィー・ハタイチャノック (2015) : 日本とタイの特別支援教育、岐阜大学留学生報告

